



BSR 通信

BSR 推進室ニューズレター第 16 号

平成 27 年 7 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室

〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1

03-5394-3079 (直通)

bsr_lab@mail.tais.ac.jp

目次

- 1 頁：巻頭言
- 2 頁：さざえ堂だより
- 3 頁：研究ノート
- 4 頁：BSR 図書室・今後の予定

仏教者の社会的責任（BSR）の理論構築を目指して

大正大学仏教学部仏教学科

学科長・教授 林田 康 順

本学の教養科目において生命倫理を取り上げるようになってから、すでに 12 年目を迎えます。講義では、生殖補助医療、脳死・臓器移植、安楽死・尊厳死といったトピックと共に、ゲストスピーカーをお招きしてうつ病の実体験を語っていただくなど、〈いのち〉の問題を広く取り上げ、正解のない答えを求めて受講生の頭と心に大いに汗をかいてもらいます。

そもそもこうした講義を担当したきっかけは、かつて臨床的仏教学研究会を立ち上げ、ターミナルケアについて学び始めたことに遡ります。仲間とともにホスピスやビハールを全国に訪ね歩き、命の終焉を間近にされた方々にとっての仏教者の社会的責任を追い

求めました。

多くの経験と学びを重ねる中で思い知ったのが、一部の仏教系施設を除いて仏教や仏教者の姿をほとんど見出せないという厳しい現実でした。

なるほど医師や看護師の方々に話を伺うと「医療の場で仏教が一定の役割を果たすべき！」という期待を寄せられます。しかし、いざ具体的な話になるとその進展にはいくつかの壁が立ちほだかっていました。

その大きな原因の一つが多様な宗教・宗派の存在に求められ、それがかえって足かせとなり、あちらを立てればこちらが立たずというジレンマに陥ってしまうのです。だからこそ私達仏教者は、医療関係者の方々と十分な話

し合いをもち、医療の現場が宗教に求めているものと求めていないものとを十分に認識した上で、仏教や各宗派の教えを適切に伝え活かしていくことこそ求められている、と広く訴えてきました*。

あれから 20 年が経ち、この度、BSR 推進室の小川有閑氏と高瀬顕功氏が中心となって「多死社会における仏教者の社会的責任」研究会（研究代表者・林田）が正式に立ち上がりました。少子高齢社会の到来に伴う仏教寺院の衰退が叫ばれている一方、7 万 5 千を超える寺院と 30 万を超える僧侶が持つ潜在能力は決して侮れません。

多死社会を迎える今こそ仏教者

は、現場の多様な意見に真摯に耳を傾け、多くの方々との丁寧な話し合いに基づいた上で、その社会的責任を果たすべき時であり、私達はその理論構築を目指して根気よく取り組んで行く決意を新たにしているところで

* 拙稿「宗教と医療の接点—付、日本人の宗教心と法然浄土教—」（『大正大学総合仏教研究所年報』19、1997）、同「医療と宗教の接点を求めて—医療の現場が宗教に求めているもの、いないもの—」（『ザ・ラングパースペクティブス』18-2「医療と哲学 第 28 回」、2010）参照。

さざえ堂だより

— 鴨台七夕盆踊りレポート —

7月3日・4日の両日、「鴨台七夕盆おどり」が開催されました。

このイベントも今回で第5回を数え、すっかり巢鴨地域の初夏の恒例行事となりました。例年、盆踊りシーズンの幕開けとなる盆踊大会とあって、近隣の踊り好きの方々が集まります。学生たちは事前に地域の踊り愛好家の皆さんから踊りを習い、当日は女子学生がゆかたの着付けをしていただくなど、地域の方々と交流をしながらの開催となります。

今年の鴨台盆踊りは、“七夕”を名前に配しました。現在、本学地域構想研究所が進めている地方自治体との連携のご縁で、宮城県から東北三大祭りの一つに数えられる「仙台七夕まつり」の七夕飾りと仙台市から1954年（昭和29年）から1980年（昭和55年）までの仙台七夕まつりのポスターをお借りして展示しました。



また、近隣の清和小学校、朝日小学校、西巢鴨小学校の児童や来場の皆さんが思い思いの願

い事を書いてくださった短冊・色紙を竹飾りや中灯籠に飾りました。

両日ともあいにくの天気となっただけ、場所を3号館ロビーに変更しての開催となりました。午後4時20分の塩入法道図書館長の開会宣言に引き続き、天台宗の法式による「施餓鬼法要」、真言宗豊山派学生の豊山太鼓の奉演、「ゆかたコンテスト」そして盆踊りへと進んでいきました。盆踊りでは、「炭坑節」、「東京音頭」、「相馬盆唄」、「アンパンマン音頭」そして「巢鴨音頭」を踊りました。また「炭坑節」の振り付けを AKB48「恋するフォーチュンクッキー」や妖怪ウォッチ「妖怪体操第一」で踊ったり、三代目 J Soul Brothers「流星」を「アンパンマン音頭」の振り付けで踊ったりと、学生と、小さなお子さんから年配の方まで大勢の方が輪になって、大変盛り上がりました。休憩中には、巢鴨の太鼓連「鼓友」の太鼓演奏があり、子供たちの元気な太鼓で祭りに花を添えていただきました。

併せて、学生有志団体による模擬店が開かれ、来場の人々は小雨まじりの天気ながら祭りの雰囲気を楽しんで



いました。ここでも「庚申塚商栄会」より以前この誌面にて紹介したさざえ堂パン・オクトくんの「パンまるじゅう」さん等にも出店いただき、大正大学がここ西巢鴨の地でしっかりと地域の皆様と連携し、地域の活性化の一端を担っていることが顕現出来たイベントになったと思います。

七夕は古くは、「棚機」・「棚幡」と表記していました。それがお盆を迎える準備として7月7日の夕方（七夕＝シチセキ）に行われたことと相混じって、「七夕」というようになったという説もあります。実はお盆と関係する行事のようです。盆踊りも、踊念仏がその由来であるとも言われています。

こうした古くからある日本の伝統行事を伝えるとともに、それが仏教やその信仰に裏打ちされたものであるということを説明していくことも「仏教者の社会的責任（BSR）」ではないか！と思いつつながら「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら・・・」と踊りの輪に入って楽しませていただきました。（M）

研究ノート

自死に向きあう

—自死者追悼法要について④—

6月10日に東京都港区・増上寺を会場に自死者追悼法要「俱会一処〜ともに生き、ともに祈る〜」が催されました。

この法要は、2009年から毎年6月10日に行われていて、今年で7回目。時の記念日であるこの日に開催されるのは、「大切な方とともに生きた『時』を思い、集い、手を合わせてともに祈り、これからともに生きてゆきたい」という趣旨から。

主催者の浄土宗東京教区教宣師会は、東京都内の浄土宗寺院に所属する僧侶資格を取得してから十年以内の僧侶を対象に行っている教宣師講座を受講完了した「教宣師」によって構成されています。この教宣師会とその他有志僧侶によって法要が営まれます。

なお、法要は浄土宗の形式で営まれますが、参列者の宗旨は不問とされています。

事前研修の義務化

法要にたずさわるスタッフには、全2回の事前研修への参加が求められます。

研修の内容ですが、第1回は「自死遺族の声を聴く、自死遺族に僧侶やお寺ができること」、第2回は「浄土学から見た自死」というもの。

これまでの連載で述べてきたように、つらい気持ち抱えている自死遺族が僧侶の配慮に欠ける言動でさらに傷つくという事例は少なくありません。追悼法要

に来られた方々に、そのような思いをさせてしまわないように、自死遺族の現状とケアのあり方を学ぶ目的で、第1回の研修では、自死遺族にお話しをきき、僧侶、寺院にのぞむことを提言していただいています。時には、僧侶に厳しい意見も出ますが、それこそが学ぶべきポイントといえるかもしれません。

また、法要にたずさわる浄土宗僧侶として、自死であっても差別されることなく、阿弥陀如来に救っていただけるという確固たる心構えをしておくために2回目の研修が用意されています。毎年、大正大学の林田康順教授が講師をつとめ、浄土宗義からの自死の捉え方、浄土宗僧侶として自死とどう向き合うかが講義されます。

こうして2回の研修を経ることで、深い悲しみを抱えて参加される遺族を、動揺せず、しっかり、かつゆつたりと迎え入れることができるようになるのでしょう。



今年の法要の様子

裏方スタッフこそが重要

法要当日は、増上寺の三門から受付にいたるまで10名近い僧侶が案内係として境内に立ちます。

実はこの案内係は、こうした法要ではとても重要な役目を果たします。法要に来られる遺族の中には、日常生活ではなるべく亡き人や自死ということを考えないようにしている方、家族を自死で亡くしたことを世間に隠している人もいます。そのような様々な思いを持たれて初めて参加するような場合、非常

に緊張されているでしょうし、本当に安心して過ごせる場所なのか、不安が募ってしまうのも無理ありません。なかには、三門付近からすでに涙を流される参列者もいます。

ですから、三門や境内各所で、法要の案内板を手にして、声をかけられれば、安心感を与えるような対応をする。決して腫れ物に触るような態度ではなく、構えずぎないことも肝要です。

同じことは受付係にもあてはまります。法要中、導師が参列者の名前と亡き人の名前（戒名もしくは俗名）を読み上げる「回向」の時間があります。事前に申し込みをされている方には、その読み方の確認。当日参加の方には、その旨を説明し、同じく読み方を確認します。参列者にとって、回向は、仏さまに亡き人の名を伝え、浄土で守ってくださるようお願いをする、法要の核にあたる時間。そこでお名前を間違ってしまうと、落胆をさせてしまうこととなりますから、受付の使命は重大です。

また、法要では、亡き人へのメッセージを書いていただければ、法要中、仏前に奉納し、後日、お焚き上げをすることになっています。メッセージは事前郵送、持参、当日記入の3パターンがありますが、当日記入であれば、書きながら感情がこみ上げてきてしまうものです。そうした方へのケアも受付の役割となります。誰にとっても安心・安全な場であるよう、全体に気を配ることが求められるのです。

法要というと、導師や式衆といった表に出る僧侶が目立ちがちですが、その実、案内係や受付係といった裏方の働きが、参列者の安心感を醸成し、心から祈ることのできる環境作りには欠かせないのです。(〇)

BSR 図書室

江島尚俊・三浦周・松野智章編

『近代日本の大学と宗教 ―シリーズ大学と宗教(1)』
(法蔵館、2014 年、3,780 円)

日本が近代化していく明治～昭和初期にかけて、宗教系学校はどう変化をしていったのか、いや、むしろ、どう変化をせざるをえなかったかと言った方が適切な表現かもしれません。その過程を、多角的に明らかにしていこうというのが、本書の主題といえるでしょう。

「宗門校」や「宗門大学」と今では当たり前の存在ですが、ここにいたるまでは、まさに相克というべきものがありました。

明治時代の前半まで、宗教者の育成の場所は、僧堂といわれる宗門機関で行われるのが常でした。そこでの教育は、教理教学や儀礼を学ぶ事に主眼が置かれたもので、いわゆる近代学問体系とは一線を画するものです。しかし、時代の流れは、西洋的・近代的学問を求めていきます。大学制度が整備され、それまで独自の教育システムを有していた各教団も、流れには逆らえなくなっていくます。ここに伝統的教育と近代学問の葛藤



が生じるのです。たとえば、伝統的・護教的仏教学から、実証的・客観的な近代仏教学へとカリキュラムの比重が変化し、それまで重要視されていた寺院での法務その他の伝統的実践も近代的プログラムから排除されていくことにもなりました。

本書はこの伝統と近代の相克を、仏教系大学にとどまらず、キリスト教系学校、宗教者・学者となった個人など、さまざまな対象を扱いながら、浮き彫りにしていきます。宗教者の育成のあり様が変われば、宗教者像も変化していくもの。現代の宗教者のあり方を考えるうえでも、来し方を学ぶことは有意義なことではないでしょうか。(O)

今後の予定

7月18日(土)	11時～12時	花会式(真言宗智山派)	鴨台観音堂前
	9時～13時	あさ市	南門 けやき広場
	13時～15時	お坊さんカフェ僧話花	5号館 1階
7月30日(木)	18時30分～	光とことばのフェスティバル	3号館前広場

※8月の花会式はお休みします。

9月は9月19日(土)の予定です。



巻頭言執筆者 紹介

林田康順 (はやしだ こうじゅん)

仏教学部仏教学科教授

1988年 慶應義塾大学 法学部卒業

1994年 大正大学大学院 文学研究科 博士後期課程
単位取得満期退学

芝学園(中学高等学校)、本学非常勤講師等を経て、
2004年より本学特任専任講師、2013年より現職、同時に
仏教学科長に就任。法然浄土教研究の他、生命倫理・環境
問題に関する著書・論文多数。浄土宗所属。